

着物の修繕と手入れの痕跡に関する調査

—近代衣生活資料から中田静のモスリンの長襦袢と替え袖を事例として—

小林 政子

附属総合ミュージアム 嘱託研究員

1 はじめに

2020年に武庫川女子大学附属総合ミュージアム（以下、ミュージアムと称す）の収蔵品である近代衣生活資料^{注1)}が文化庁の登録有形民俗文化財に認定されたことを受けて、着物類の調査を進めており、これまで48枚の調査を終えた。これら着物類の展示活用等に際しては、状態を維持するための補修が重要であるとともに、資料を読み解き得られた知見を社会に広く共有することが、さらに求められる。

調査した着物類のうち、長襦袢、普段着、裏地には、人の手が加えられている痕跡が多数見受けられ、家庭内で修繕や手入れが行われやすいものであったことがわかってきた。長襦袢、普段着、裏地は、着物の装いという面では主役ではなく、公に見られる機会が少ない分、大胆に手が加えられている。生活感や人間味溢れる縫製が見られ、縫製の意図を読み取りやすい、興味深い近代衣生活資料と考えられる。

本稿では、近代衣生活資料の着物について、実際にどのような修繕や手入れが行われていたのかという点について、縫製面から調査を行い、その方法と意味を明らかにする。近代において、着物の縫製や修繕、手入れは当たり前の事柄として家庭内で行われていたが、洋装が主流となった現在では、子供時分の限られた時期に着物生活をしていた、あるいは着物生活を全く体験したことがないという世代が大多数を占め、家庭内で行われていた修繕や手入れは、継承されることなく、その具体的な方法はあまり知られていないことから、これらを明らかにすることは意義が大きいと思われる。また、ミュージ

アム収蔵品である近代衣生活資料の着物の補修においても、日常的に家庭内で行われていた修繕や手入れを応用できる余地がある。

調査の方法は以下の順序で行う。1 実物資料を確認し、生活の過程で人が手を加えたと思われる修繕等の痕跡を読み取る、2 関連する写真等の記録もあわせ修繕等の方法を明らかにする、3 和裁関連の裁縫書を手掛かりとして、筆者の和裁士としての経験^{注2)}にも照らしながら、その意味を探る。

調査対象は、ミュージアムにおける近代衣生活資料のうち中田家コレクション^{注3)}から、中田静さんのモスリンの長襦袢（収集番号10176）^{注4)}と替え袖（収集番号10177）（図1）（以下、本資料とし、長襦袢と替え袖の両方を指す）を取り上げる。本資料は中田静さん（以下、静さんとする）着用時の写真等が残されている数少ない資料のひとつであり、調査から得られることが多いと考えられる。

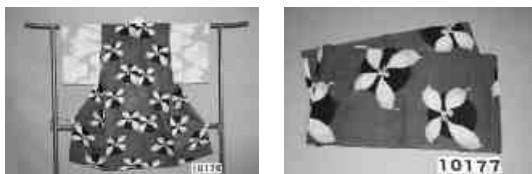


図1 中田静さんのモスリンの長襦袢（10176）（左）とモスリンの替え袖（10177）（右）

調査対象としたモスリン^{注5)}の長襦袢^{注6)}と替え袖^{注7)}は、1937年（昭和12年）に、元々は長襦袢と替え袖ではなく、静さんがモスリンの長着^{注8)}として着用していたことが、アルバムの写真からわかっている（収集番号50632）（図2）。

この写真から、本資料を長着として着用していた正確な時期がわかるだけでなく、着物の形状・用途を変化させる「繰り回し^{注9)}」が行われる前の着姿が確認できる。繰り回し後の実物資料と比較することで、その方法や姿について正確な情報を得ることが可能になる。収蔵品の中でも、繰り回し前の姿と繰り回し後の実物が明確に残されている事例は、極めて稀なケースである。

整理されていない着物姿の写真が多い中、この写真は上等に見える三越の薔薇模様のアルバムに収められていた。このアルバムには、表紙の裏側に「懐かしき思ひ出」と書かれており、特別感があり、大切な写真を選んでまとめたように見える。1937年（昭和12年）に庭園のような場所で撮影していることから（図2）、静さんが外出にも好んで着用する愛着のある着物であったことが窺える。



図2 アルバムの写真（50632）（1937撮影）
それぞれ右の写真がモスリンの長着

本資料は、臙脂色のモスリンの長襦袢と替え袖で、黒円の上に葎にも見える青、黄、橙の三つの点を配し、そこから白い四枚の花弁状のものが伸びる抽象的ではあるが印象的な柄が施されている。

長襦袢の形状は、衿（^{おくみ たてまり}堅衿）がついていなかった。ウールやモスリンは暖かい^{ひとえ}ため、通常は裏地を付けないが、本資料も単仕立て、紺色の綿の肩当^{かたあて}と白い綿の居敷当^{いしきあて}を付けていた。背・脇の直線縫いと、肩当と居敷当の端の始末はミシン縫いである。身頃の肩には肩揚げ^{ゆき}がしてあり、それを外せば肩幅を広げられるよう、衿寸法の調節ができるようになっていた。全体の基本的な寸法は、（表1）に示す。

表1 モスリンの長襦袢と替え袖の基本的な寸法

| モスリンの長襦袢の部位 | 鯨尺寸法 | メートル寸法 |
|-------------|---------------------|-----------------------|
| 身丈（肩山から） | 3尺2寸3分 | 121.6cm |
| 袖丈 | 1尺3寸5分 | 51.1cm |
| 袖幅 | 8寸3分 | 31.4cm |
| 袖付 | 5寸3分 | 20.1cm |
| 袖口 | 6寸 | 22.7cm |
| 袖丸み | なし | なし |
| 身八つ口 | 4寸 | 15.2cm |
| 肩幅 | 7寸7分 | 29.2cm |
| 衿（ゆき） | 1尺6寸 | 60.6cm |
| 後幅 | 8寸 | 30.3cm |
| 抱幅（後幅の） | 8寸 | 30.3cm |
| 前幅 | 8寸5～7分 | 32.2cm～33cm |
| 抱幅（前幅の） | 7寸7～8分 | 29.2～29.5cm |
| 衿幅（堅衿幅） | 衿（堅衿）なし | 衿（堅衿）なし |
| 合袂幅（あいづまはば） | 衿（堅衿）なし | 衿（堅衿）なし |
| 袂丈（つまたけ） | 1尺8寸5分 | 70.1cm |
| 衿下がり | 衿（堅衿）なし | 衿（堅衿）なし |
| 衿丈 | 1尺8寸6分 | 70.5cm |
| ながれ丈 | 衿（堅衿）なし | 衿（堅衿）なし |
| 衿幅 | （天）1寸5分 （衿先）1寸6分 | （天）5.7cm （衿先）6.1cm |

| モスリンの替え袖の部位 | 鯨尺寸法 | メートル寸法 |
|-------------|--------|--------|
| 袖丈 | 1尺3寸5分 | 51.1cm |
| 袖幅 | 8寸3分 | 31.4cm |
| 袖付 | 標なし | 標なし |
| 袖口 | 標なし | 標なし |
| 袖丸み | なし | なし |

長襦袢には、違う生地 of 袖（絹・縮緬）が付けられていた（図1）が、袖丈の縫い込みが7寸1分（26.9cm）と、かなり余裕をもたせて袖の内側に入れ込んであった。長襦袢として付けられた白い衿には、汚れやシミのようなものが沢山あり（図9）、日常的に使用されていたと思われる。半衿は無かった。

生地の状態は、長襦袢の身頃も替え袖もモスリンの生地が虫害で傷んでいる箇所が多く見受けられた（図3）。それに比べ身頃に付けられた絹の袖には、虫害による傷みは全くなかった。

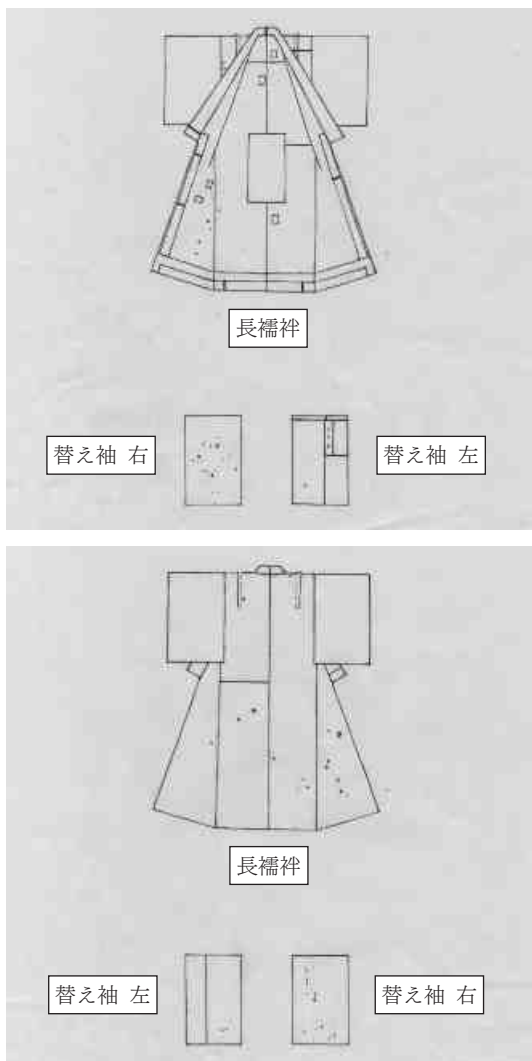


図3 生地 of 傷み（黒い点）の分布図、（上）前、（下）後

2 着物類の調査項目

近代衣生活資料の着物類の調査について、次のような項目で行っており、調査対象としたモスリンの長襦袢と替え袖についても、同様に行うこととした。

まず、実物資料の状態を目視で確認するが、その際、（表1）のような寸法表を作成するとともに、意図的に人の手が加えられた手入れの痕跡（①修繕、②解いた縫い目の跡、③残存するスジ跡、④継ぎ目、⑤特徴的な折り跡、⑥通常とは異なる縫製、⑦現在とは異なる縫製、⑧寄贈者の手紙や写真から得られる情報等）に注目し、細部に渡る忠実な記録（全体と痕跡の寸法、特徴的な点、構成、部位、形、色、柄、素材等）を（図4）のように行った。

①の修繕は、近代の衣生活の中で、家庭で行われることが多く、一般家庭の中でどのような修繕が行われていたのかを知る手掛かりとなる。②、③は、仕立て直しが行われた可能性が高く、寸法直しにも見られる傾向である。大きいものを小さくする場合、その痕跡は縫い込みに隠れてしまうが、小さいものを大きくする場合は、小さい時の縫い目や痕跡が残りやすい。その痕跡が完全に消されず残っていれば、家庭で寸法直しを行った可能性が高い。着用者の体型の変化や、着用者自体の変化を示唆しているが、形状を変えて違う種類のものに作り替える「繰り回し」を行う際にも見られる場合がある。④は、繰り回しを行う際に、よく見られる方法で、目立たない部位で行われることが多い。⑤は、羽織の裾には他の種類にはあまりない前下がりという斜めの線が残るため、羽織だったことがわかる。⑥は、縫い手の創意工夫に関わる点であり、⑦は、現在と近代の生活様式等の相違を映している可能性がある。⑧については、実物資料と記録を確認しながら、過去に扱ってきた仕立物の縫製の事例や種類の特徴と照らし合わせ、そのような手法を取った理由や経緯を読み取った。

以上について、筆者の和裁士としての経験と踏まえて、和裁の技術面からの解析を試みる

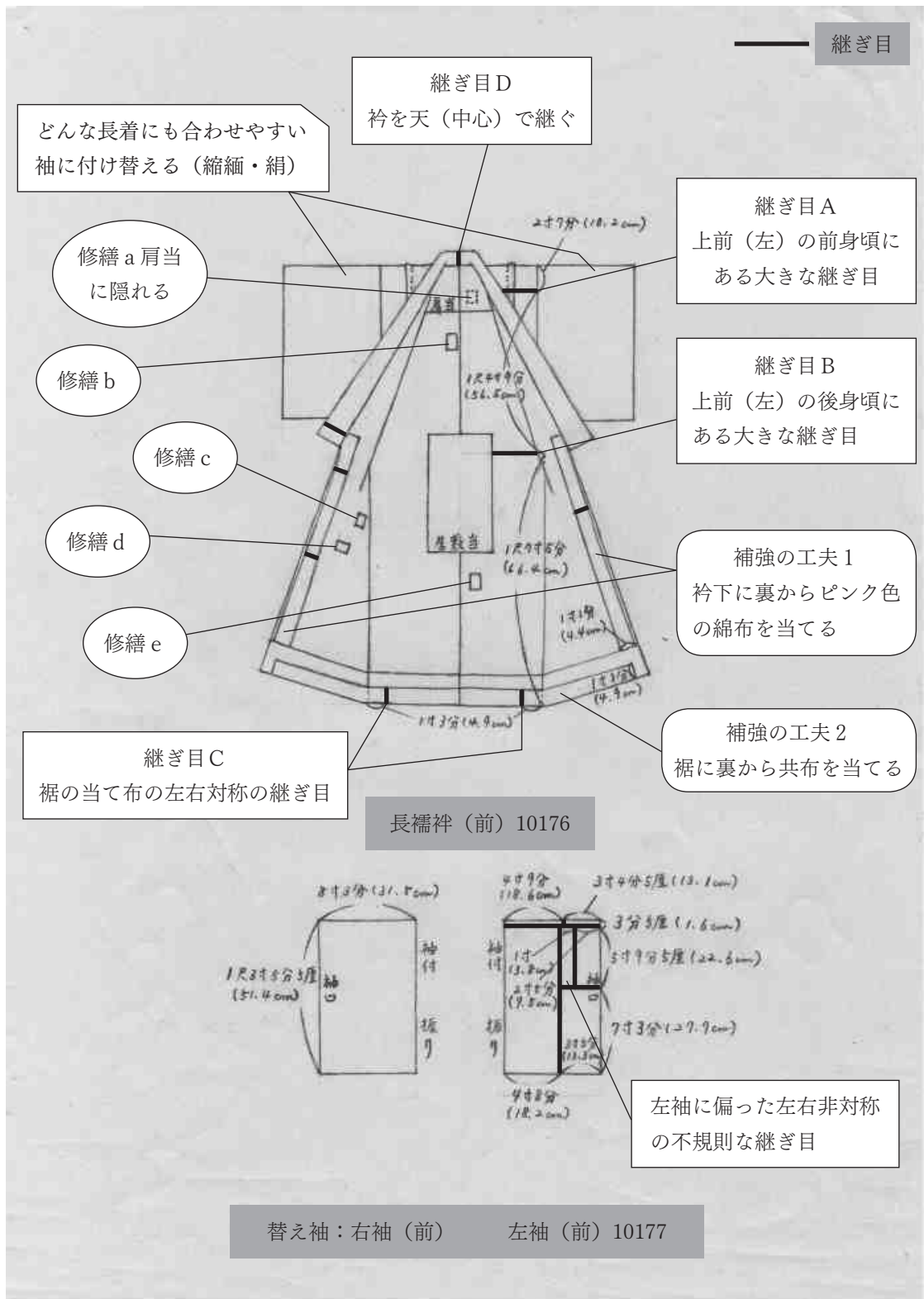


図4 モスリンの長襦袢と替え袖に残された修繕や手入れの痕跡

とともに、本資料と同時期に存在した裁縫書を手掛かりとして確認することにした。アルバムの写真からは、静さんが昭和12年にモスリンの長着として着用していることから、昭和9年発行の大妻コタカ著『現代裁縫全書』（研文書院）¹⁾と、昭和11年発行の青芳とみ子著『百時間教授の実際』（婦人之友社）²⁾で確認することにした。『現代裁縫全書』には、他の裁縫書ではあまり取り上げられていない家庭的な内容である繰り回しについての詳しい記述があることと、『百時間教授の実際』では、昭和初期にあったと思われる長襦袢の豊富な形態などが図入りで詳しく記されていることから、この2冊を選定した。

3 着物類の調査結果

調査からは、先に示した8つの調査項目のうち、①修繕、④継ぎ目、⑥通常とは異なる縫製、⑦現在とは異なる縫製、⑧寄贈者の手紙や写真から得られる情報等、が確認できた。①修繕、④継ぎ目、⑥通常とは異なる縫製、⑦現在とは異なる縫製は、いずれも家庭で施したと思われる痕跡で、⑧寄贈者の手紙や写真から得られる情報等は、前述のアルバムの写真（図2）と、後掲の和服のコートに関する紙面（図14、15）と衿型の型紙（図16）から得られる情報である。

なお、⑦現在とは異なる縫製とは、身頃とは違う生地が袖が付いていることと、衿（堅衿）が付いていない点を確認されたが、近代の長襦袢には同様の事例が多く見受けられ、一般的な縫製とされているため本稿では省略する。

（1）修繕（刺し継ぎ）

①の修繕では、長襦袢の身頃に、合計5箇所の修繕が見られた（図4）。後身頃に3箇所、前身頃に2箇所あった。毛織物であるモスリンは、虫害に遭いやすい性質があり、実際に虫害が広範囲に及んでいたことから、これらの傷みを修繕した痕跡と考えられる。5箇所の修繕の痕跡は、傷みよりも少し大きめに切った四角の共布を裏から当てて、表に小さな目を出してと

めているところまでは、どれも似ており、刺し継ぎと呼ばれる技法が用いられていた（表2）。

筆者は1996年（平成8年）以降の仕立ての現場でこの手法を見たり習ったりする機会がなかった。日常的に着物を着用することが殆どなくなった現在、日常着としてできた損傷等を仕立ての現場で目にする機会は殆どない。洗い張り^{注10)}の着物はあるが、状態はさほど悪くないものばかりで、使い古した普段着の着物など、現在は仕立て替えに出すことも躊躇される風潮がある。そのため、修繕痕については、調査項目で述べた同時期の裁縫書で確認することにした。

『百時間教授の実際』²⁾では、目次の基礎縫いの項目に、「布の接ぎ方、繕ひ方（片返し接◇割り接◇掛け接◇寄せ接◇色紙接◇刺し接◇穴接）」とある。7種類もの生地の接ぎ方、繕ひ方が挙げられており、修繕が裁縫の基本的な事柄として扱われていたことがわかる。その説明には次のような記述が見られ、ここからもこれらの方法が一般的に行われる修繕であったと理解できる。

二枚の布を接ぎ合わせる仕方、布が弱つたりいたんだりした場合に継ぎを當てゝ、繕ふ仕方にもいろいろ^{注11)}ありますが、最も普通に行はれる接ぎ方、および簡単な繕ひについて説明いたしませう。

静さんが行っていた修繕は、この7種類の方法のひとつである「刺し継ぎ」（目次では「刺し接」だが本文では「刺し継ぎ」と表記あり）に該当した。刺し継ぎについては、本文では次のような説明がされている。

刺し継ぎ

よほどひどくいたんだところへする方法で、表へ極く小さく、裏は少し大きく、糸と糸の間をつめて、ぐの目に刺す仕方です。継ぎ糸は共色で、少しゆるめ加減にします。

『現代裁縫全書』¹⁾でも確認したが、目次では、刺し継ぎは、「繰回しの部」という項目の中にあり、着物の手入れのひとつとして紹介されている。手入れに対する考え方については、次のように記述している。

着られなくなつたからといつてそのまゝ筆筒の中へ藏ひこんでおかないでそれ相當に役立たせることは女のつとめであります。

又衣類はどんな地質のものでも着用の間にだんだん^{注12)}汚れたりいたんだりすることは止むを得ない事ではありますが、これもその間の手入れの仕方では餘程地質のいたみを防ぐことが出来て、同じ物でも長く使用することが出来ます。

又一面衣類の手入れを怠つて汚れたりいたんだりした物をそのまゝ着用するといふことはその人の品性にも関係しますから衣類の手入れは手まめにすると同時に上手な繰り回し方を工夫して出来るだけよく

利用することが大切であります。

衣類の手入れは女性の仕事であり、まめに行い、工夫しながら長く衣類を利用することが美德とされている。

加えて、『現代裁縫全書』¹⁾によると、刺し継ぎは、「上手な布の継ぎ方、接ぎ方について」の中のひとつであり、「色紙継ぎ」に準じた方法で、色紙継ぎが表に二目か三目落とすのに比べて、一目落としで刺すという違いがあるとされている。色紙継ぎについて、次のように説明している。

和服の継ぎ當には一番多く利用される方法です。地質の損じた處、自然に薄くなつた處に、共布の布目や、縞目を合せて、それよりは稍大きい目の布を當て、周圍を簾でおさへ、共色の細い糸で刺してゆきます。(中略) 尚糸はつれないやうに注意し、両端に幾分の弛みを見て置きます。

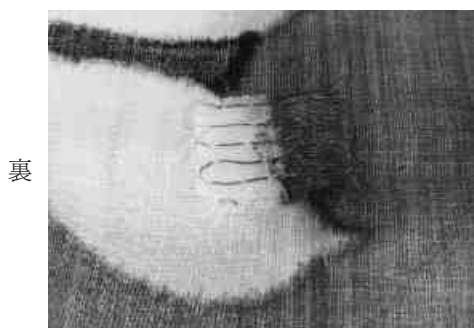


図5 静さんの刺し継ぎ

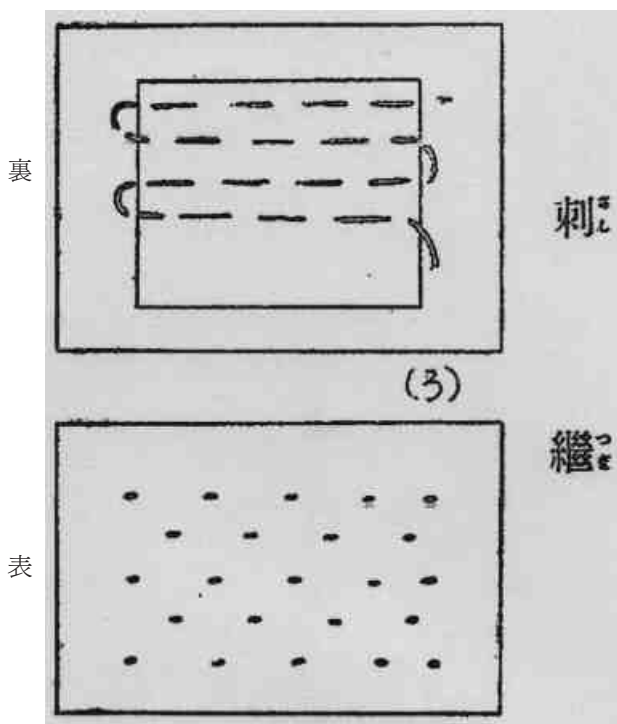

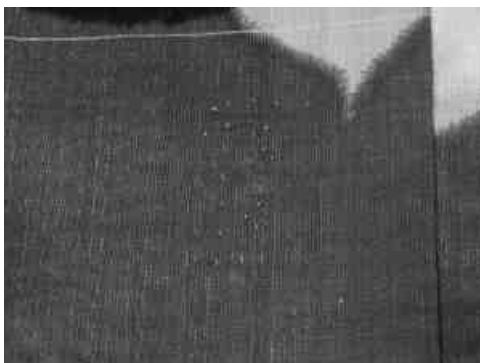
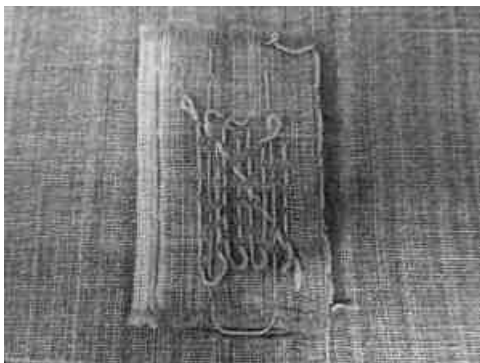









図6 刺し継ぎの図(大妻コタカ『現代裁縫全書』, 研文書院, 昭和9年) 528頁¹⁾

表 2 修繕 a ～ e についてまとめた表

| | 裏 面 | 表 面 |
|------|---|---|
| 修繕 a |  <p>【当て布】共布（縦：約 5 cm 横：約 3.2 cm）使用。</p> <p>【方法】当て布を当て黄土色の糸で大きく全体的に刺し継ぎする。途中で一段戻って刺し継ぎしている。</p> |  <p>【損傷箇所】上前（左）の後身頃の背縫いの横（詳しい部位については修繕 a ～ e まで（図 4）を参照）。損傷の程度は修繕によりはっきりとはわからなくなっている。</p> |
| 修繕 b |  <p>【当て布】共布（縦：約 5 cm 横：約 3.3 cm）使用。</p> <p>【方法】まず当て布を当て黄土色の糸で大きく全体的に刺し継ぎする。次に損傷部分を同じく黄土色の糸で、重点的に細かく刺し継ぎする。最後に斜めに糸を渡す。</p> |  <p>【損傷箇所】下前（右）の後身頃の背縫いの横。損傷の程度は修繕によりはっきりとはわからなくなっている。</p> |

| | 裏 面 | 表 面 |
|---------|--|---|
| 修繕 c |  <p>【当て布】共布（縦：約4.5cm 横3.7cm）使用。 【方法】まず当て布を当て臙脂色の糸で大きく全体的に刺し継ぎをする。そのまま糸を切らずに刺し継ぎで損傷箇所の方へ戻り、損傷箇所を小さく刺し継ぎする。次に黄土色の糸でさらに損傷箇所を小さく刺し継ぎする。</p> |  <p>【損傷箇所】下前（右）前身頃。損傷の程度は修繕によりはっきりとはわからなくなっている。</p> |
| 修繕 d |  <p>【当て布】共布（縦：約3cm 横：約4cm）使用。 【方法】まず当て布の白い部分と身頃の花びらの柄の白い部分が合うように配置してから、臙脂色の糸で大きく全体的に刺し継ぎする。次に同じく臙脂色の糸で損傷箇所の穴あき部分を円形に細かくまつ。</p> |  <p>【損傷箇所】下前（右）の前身頃。縦長の楕円形の穴あき（縦：約1cm 横：約0.6cm）が確認できる（図6）の表の図を拡大）。</p> |

| | 裏 面 | 表 面 |
|---------|--|--|
| 修繕 e |  <p>【当て布】共布（縦：約3.5cm 横：約2.6cm）使用。</p> <p>【方法】まず当て布を当て黄土色の糸で全体的に刺し継ぎする。次に臙脂色の糸でもう一度刺し継ぎしている。</p> |  <p>【損傷箇所】上前（左）の後身頃の背縫いの横。損傷の程度は修繕によりはっきりとはわからなくなっている。</p> |

以上から、静さんは着物の修繕に、最も一般的な、基本的な方法を取っていたと考えられる。刺し継ぎで糸にゆるみを持たせる点など、教科書通りに、基本に忠実に刺し継ぎの修繕を行っていたことがわかった（図5、6）。

一方で、この5箇所の刺し継ぎは、それぞれに違いが見られた。5箇所の修繕を修繕a～eとし、裏面・表面から見た写真と、当て布の大きさ、修繕の方法、表から見た損傷箇所の大きな部位と状態について、次の（表2）にまとめた。

修繕a～eについて、基本的には、当て布を裏から当てて全体的に刺し継ぎしているのはいずれも同じである。但し修繕aは、途中で1段戻り、糸と糸の間を刺し継ぎしていた。刺し継ぎを一度だけして終わっているのは修繕aだけで、残りの修繕は次の工程が見受けられた。

修繕bは、全体的に刺し継ぎをした後、損傷箇所を小さく細かく刺し継ぎをし、最後に斜めに糸を渡している点が特徴的な点で、入念に補強していることがわかる。

修繕cは、全体的に刺し継ぎをした後、そ

のまま糸を切らずに刺し継ぎで損傷箇所に戻っていき、損傷箇所を小さく刺し継ぎしてから、糸を変えてもう一度損傷箇所の糸と糸の間を小さく刺し継ぎしている。これも強度を上げるためと考えられる。

修繕dは、他の傷みに比べ損傷箇所がはっきりわかり、縦長の楕円形の穴あきが確認できた。修繕dは、全体的に刺し継ぎをした後、損傷箇所のその穴あきに沿って小さく細かくまつっている。

修繕eは、全体的に刺し継ぎをした後、もう一度少しずらして刺し継ぎをしていた。

以上のように、修繕は5箇所全てにおいて、当て布を当てるところまでは似通っていたが、次の工程では同じ方法を取らず、傷みに合わせて臨機応変に行っていた。1工程で終わっていたのは修繕aだけで、修繕dとeは2工程あり、修繕bとcは3工程あり、特に入念に修繕を行っていた。

（2）継ぎ目

調査過程で特に目を引いたのが継ぎ目^{注13)}の多さであり、合計14箇所の継ぎ目が確認され

た（図4）。本来継ぎ目のない場所に継ぎ目があることは、継ぎがなくてはならない理由があったことを意味している。繰り回しを行う場合、目立たない場所で丈や幅に生地を継いで帳尻を合わせることはよくあることで、形状の変化を示唆していることも多い。

本資料には身頃に9箇所（上前前身頃に1箇所、後身頃に1箇所、衿に2箇所、上前衿下の補強布に1箇所、下前衿下の補強布に2箇所、裾の補強布に2箇所）、替え袖の左袖に5箇所あるが、その継ぎ目が和裁士である筆者から見

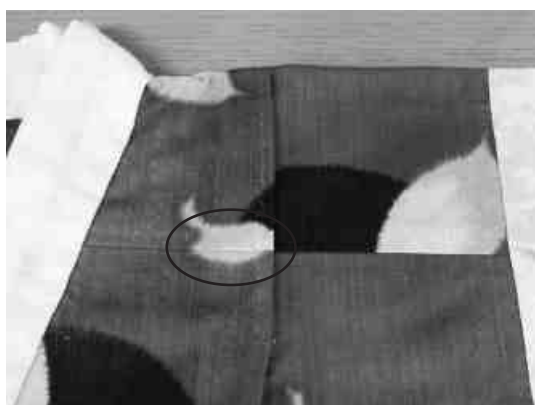


図7 上前の前身頃の継ぎ目A 表

ても秀逸で、初見では気付かず見落としてしまうようなものもあった。

大妻コタカ『現代裁縫全書』¹⁾の中に、「凡て継ぎ物や接ぎ物の要領は、その継ぎ目や接ぎ目がわからないやうに、手ぎわよくするといふ事が肝心であります、それには練習が必要であります」という記述がある。継ぎ目や接ぎ目は出来るだけ目立たないようにするのが基本だが、継ぎ目をうまく縫うのは簡単なことではなく、特に縫い目を割る場合は、まっすぐに縫えずに歪みがあれば目立ってしまうので、運針^{注14)}の良し悪しが重要になる。

記述にもあったように、通常、継ぎ目は出来るだけ目立たない部位にくるように行われるが、この長襦袢を単体で見たとき、上前の身頃に2箇所、布端から布端までを横断する大胆な継ぎ目がある（図4、7、8）。

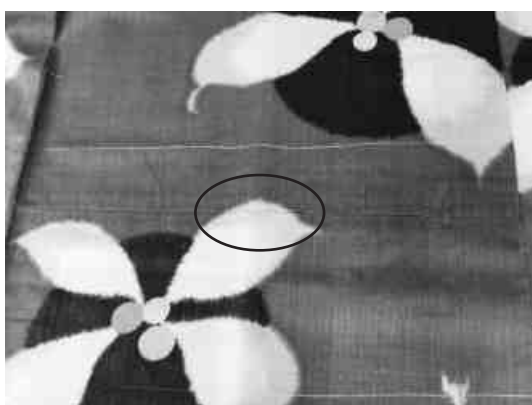


図8 上前の後身頃の継ぎ目B（上）裏、（下）表

しかし、長襦袢の上には長着を着用して、着装後の姿ではこの継ぎ目は見えなくなることを考えると、家庭ではこのような継ぎ目を目立つ部位に行うことも選択肢に含まれ、長襦袢における手の加え方は自由度の高いものだったことが窺える。それでも2箇所の継ぎ目A、Bは、よく見ると表では白い花びらの部分の柄を合わせるなど、継ぎ目を目立たなくする配慮が見られた（図7、8）。継ぎ目Aは、完全には合わないものの、部分的に合わせ（図7）、継ぎ目Bは、完全に柄を合わせていた（図8）。

着物では外観に拘り、生地的位置を左右対称に継いだりすること多いが、身頃の2箇所の継ぎ目A、B（図7、8）と替え袖の左袖の5箇所の継ぎ目（図4）は左右非対称で、規則性のないことから、おそらく修繕ではカバーしきれない汚れや傷みなどを外した可能性も考えられる。

共布を使用した裾の補強布の2箇所の継ぎ目Cだけは、継ぎ目の位置が左右対称になっていた(図4)。幅約1寸3分(4.9cm)の共布である。長着から長襦袢に仕立て替えたので、長着の時の衿と衽が不要になったことと、大きいものから小さいものへ形を変えることにより、身丈が短くなり共布の残布ができたのではないかと考えられる。それを裾の補強布に利用し、左右対称に配置できたと考えられる。

それ以外には、衿の中心にある継ぎ目D(図9、4)は、生地が足りないときに行うこともあり、生地の節約に、現在でも用いられる方法である。地衿には半衿を掛けるので、この部分も隠すことができる。

その他では、衿下の補強のための幅約1寸1分(4.4cm)の細い綿布まで、下前の衿下が

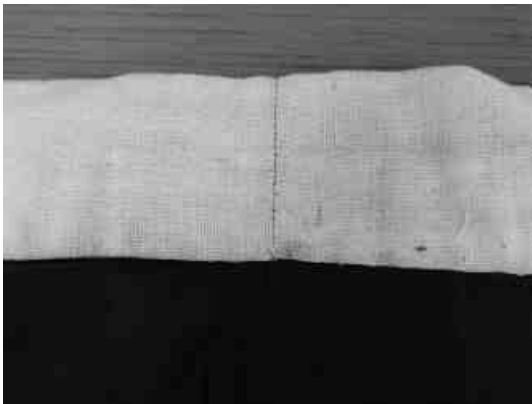


図9 地衿の中心の継ぎ目 裏



図10 下前衿下の補強布の継ぎ目 裏

2箇所(図10)、上前の衿下が1箇所、縫いでいるのが見られた(図4)。

(3) 繰り回し

調査項目として示した⑧寄贈者の手紙や写真から得られる情報等に当てはまるものとして、アルバムの写真が挙げられるが、昭和12年に元々は長着として使用されていたものが、長襦袢と替え袖へ作り替える、繰り回しが行われていたことがわかった(図11)。

繰り回しとは、生地の遣り繰りに関する方法のひとつで、異なる種類(形状・用途ともに)のものに変化させていくことである。着物は、平面的で直線縫いが基本なので、縫い込みを切り落とさず、全て縫い込んで残しているため、解けばまた元の反物の形に戻る。その性質が、様々な種類の着物類へ作り替えることを可能にしており、違うものとして再利用することができる。また、繰り回しを行うことで、汚れや傷みを隠すことや取り除くことが可能になり、結果その生地を長く着用できるようになる。

長着から長襦袢に作り替えた理由や時期について、明確に特定することはできなかったが、身頃に肩揚げが残っていることから、臙脂色という年齢的に長く着られる色でありながら、長着としてはそれほど長く着用されなかったことが推測できる。肩揚げは、成長過程の子供の着物などに、大きめの余った生地をつまんで現在の体型に合わせる方法で、大人には施さない方法だからである。

肩揚げについては、写真から長着の時にも確認できたが、上前の胸回りの柄の向きが長襦袢では逆になっていることと、肩揚げよりも継ぎ目(図7)の方が先に縫われていることから、上前の大幅な部位の配置替えを行い縫い上げた後に、改めて肩揚げを縫ったことがわかった。下前の胸回りの柄は、写真を確認すると長着の時と似ているが、肩山の位置を後身頃側に少しずらしているように見受けられ、肩揚げ付近の柄の見え方も変化していることから、下前の肩揚げも縫い直され、生地をつまむ深さが長襦袢の方が浅くなっているように見受けられた。

上前の部位の配置替えや、下前の肩山をずらした理由については、形を変える繰り回しは労力を要するため、通常は最終手段であり、やむを得ない理由で行うことが多いことを考えると、生地傷みが選択肢のひとつに浮上する。

本資料の傷みを確認したところ、虫害が顕著で、広範囲に及んでいた(図3)。部位でいうと、身頃では身丈の約半分より下が多く、身丈の約半分より上が少ない。身丈の約半分より下の部分では、下前(右)の前身頃が最も広範囲に及んでいた。下前の後身頃と、上前(左)の後身頃にも虫害が確認できたが、上前の前身頃は少なかった。着物を着用する際は、必ず上前を上にして着用するため、上前に拘り、大幅な配置換えを行った可能性がある。また、下になる下前の前身頃の広範囲の傷みは、隠すことが出来る。虫害が広がった時期を特定することは難しく、明確には言えないが、上前の前身頃に傷みが少なく、下前の前身頃に傷みが集中していることは、意図的に配置した可能性がある。

替え袖では、傷みは右袖の前後が顕著であっ

た(図3)。左袖は少なかった。左袖には5箇所継ぎ目があり、拘りが見られるのに対し、右袖には全く手がかけられていなかった。袖においては、現在では柄の配置には決まりがあるが、汚れや傷みがある場合目立ちにくい箇所に配置するという程度で、左右にはそれほど拘っていない。近代には、修繕の際、袖の左右に拘りがあったのかどうかについても今後調べていきたい。

袖を替え袖に作り替えた理由としては、長襦袢の色や素材が挙げられる。長襦袢は長着にコーディネートして着用するため、合わせにくい濃い個性的な色味であることと、モスリンという普段着の素材であることから、袖を取り外し可能な替え袖に作り変えた。そして身頃には、礼装用や社交着に合わせても違和感のない、活用範囲の広がる絹の袖に付け替えたと考えられる。現在の長襦袢では、袖だけ異なる生地を用いることは少なくなったが、近代衣生活資料の長襦袢の中には多数見受けられ、決して珍しいことではなかった。



モスリンの長着として着用
(昭和12年)

→
長襦袢に作り替える



→
替え袖に作り替える



図11 静さんの繰り回し例

(4) 創意工夫

調査項目で示した⑥の通常とは異なる縫製では、一般的な方法を取らずに縫う方法で、縫い手の創意工夫に関わることが多い。本資料では、次のような痕跡が見られた。まず、衿下部分にピンク色の綿布で補強の工夫1が見られた(図12、4)。通常単の長襦袢であれば、衿下は細く三つ折りにしてくける^{注15)}ところを、このような細い幅の、異なる生地を当てるのは異例で、目にしたことのない方法である。この綿布が当たっているところだけ、裏地付きの^{あわせ}衿のような仕様となっていた。

次に、裾に共布で補強の工夫2が見られた(図12、4)。現在の生活からは想像し難いが、近代の着物には日常生活により裾が擦り切れているものが確認できる(図13)(収集番号11162)。補強の創意工夫2は、このような傷



図12 裾の共布による補強布と衿下のピンク色の綿布による補強布



図13 女物衿長襦袢の裾の傷み(11162)

みを事前に防ぐための予防策として施されたと考えられる。

以上のように、静さんは基本を踏まえた上で、創意工夫を凝らして、自分なりのアレンジを加えていた。静さんが独創性に重きを置いていたことは、中田家コレクションの収蔵品の中の紙面からも推し量ることができる。その紙面は、表が「大丸特選婦人コート襟型」と書かれ

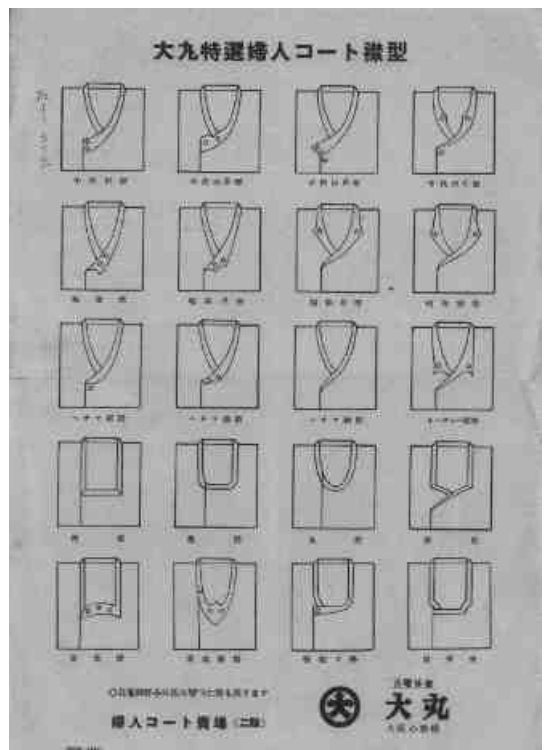


図14 表面「大丸特選婦人コート襟型」20種

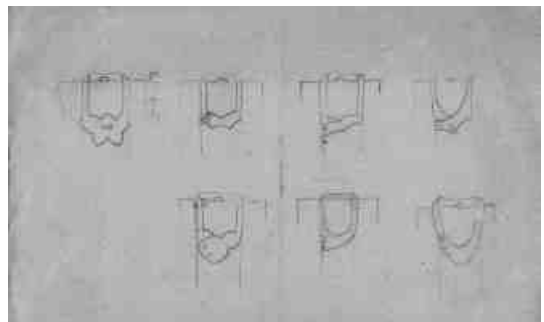


図15 裏面 静さんの手描きのコート衿型7種(51130)

た大阪心斎橋の大丸の和服のコートに関する紙面（図14）（収集番号51130）で、そこに描かれたコートの衿の種類は20種類にもものぼる。しかし裏面には、それに飽き足らず自分で考案したと考えられる衿型の図が7種類も描かれていた（図15）。

現在のコートの衿型の参考となる一般社団法人全日本きもの振興会『きもの文化検定公式教本Iきものの基本八訂版』³⁾では、コートの衿型が主に6種類（被布衿、きもの衿、千代田衿、道行衿、都衿、道中衿）とされているのに対し、「大丸特選婦人コート襟型」（図14）では20種類もの衿型に対応していたことにまず驚いたが、静さんがそれに満足していなかった点にさらに驚かされた。通常、和裁に型紙は不要だが、コートの曲線のある衿型には型紙が必要

るので、自分で身の回りにある厚紙を切って型紙を作る。曲線が多いほど型紙も複雑になり、少しでも歪みがあれば、出来上がりに響いてしまう。縫い目は縫い込みを開いて両側に倒して割る（洋服的な衿は別として）ので、隙間ができないように細かい目で糸はつらさず緩ませず線通りに縫わなければならない。小さな狭い面積に、縫い込みを収めるのも手間がかかり、複雑な衿型を縫うのは大変な作業なのである。静さんの衿型（図15）は、どれも個性的な曲線のある、縫製上難度の高い衿型で、（図15）の中の3種類と同様の形状の使用感のある衿型の型紙も見つかったことから、実際に試作をしたことがわかる（図16）。

型紙が見つかった3種類の内の1種類（図16㊸）（収集番号61191）は「大丸特選婦人コー

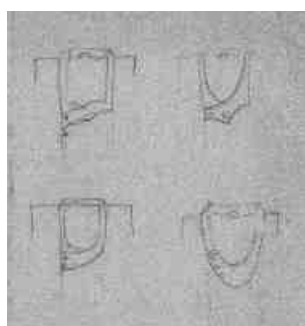


図15から抜粋

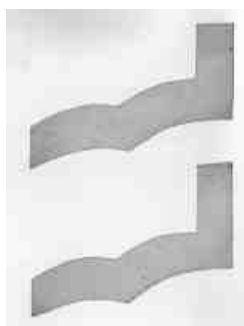


図16㊶ オリジナルの衿型

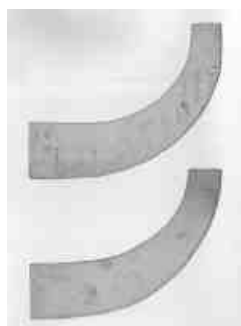


図16㊷ 「大丸特選婦人コート襟型」の中の「千代田襟」に丸みを持たせたような衿型

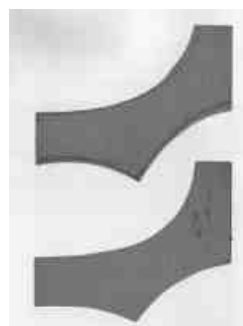


図16㊸ 「大丸特選婦人コート襟型」の中の「昭和A型」を発展させたように見える衿型

図16 考案した衿型の図に酷似した、使用感のある手作りの型紙3種（61191）

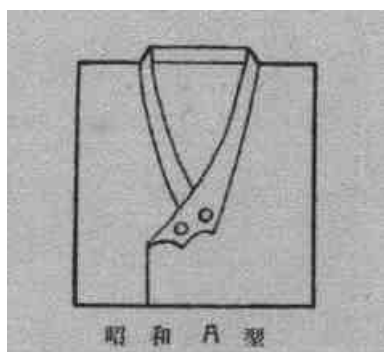


図17 図14から抜粋「昭和A型」

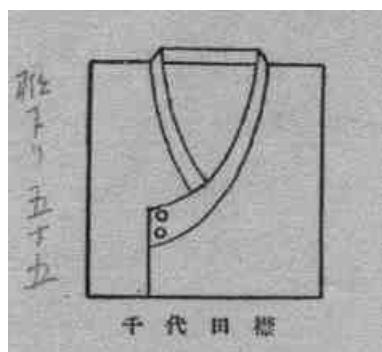


図18 図14から抜粋「千代田襟」

ト襟型」の中の「昭和A型」(図17)を発展させたようにも見える形で、もう1種類(図16④)は「千代田襟」(図18)にもう少し丸みを持たせたようなものである。残りの1種類(図16⑦)は似通ったものが見つからず、静さんのオリジナルと考えられる。

そのことから、静さんの和裁の技術力の高さと、型通りに縫うよりも、手間を顧みず自分で考案して創ることに、喜びを見出していた点が窺えるのである。

4 むすび

中田静のモスリンの長襦袢と替え袖を調査対象として、修繕等の痕跡を読み取り、関連する写真等の記録もあわせ修繕等の方法を明らかにし、和裁関連の裁縫書や筆者の和裁士としての経験にも照らしながら、その意味を探ってきた。本資料からは、家庭生活の中で着物の随所に手が加えられていたことがわかった。

5箇所(14箇所)の修繕、14箇所の継ぎ目、長着から長襦袢と替え袖へ作り替える繰り回し、静さんの思い付きによる補強の創意工夫が確認された。

5箇所の修繕は、刺し継ぎという着物の修繕では一般的な方法を基本としながら、全て同じ方法をとった修繕はひとつもなかった。修繕aは一度の刺し継ぎだけだったが途中で一段戻っていた。修繕bは二度目の刺し継ぎで損傷部分を細かく補強し、さらに斜めに糸を渡すという独特の方法を取り、入念に補強していた。修繕cは、一度の刺し継ぎの延長でそのまま損傷箇所に戻り、もう一度違う糸で細かく補強していた。修繕dの円形の穴あきには、当て布の柄の色も穴あき部分に合わせてから刺し継ぎした後、円形に沿って細かくまつていた。修繕eは、二度の刺し継ぎが行われていた。刺し継ぎの回数や糸の入れ方がそれぞれ異なることから、修繕は損傷の程度に合わせて臨機応変に行われていた。刺し継ぎの最後に、斜めに糸を渡したりするなど、静さんのアレンジにより、補強の効果を高めていることがわかった。

継ぎ目に関しては、現在の長襦袢では大き

な継ぎ目を入れることは殆どないが、本資料では思い切った袂の入れ方をしており、長着の下に着る普段着の長襦袢は、個人の思い付きでアレンジも加えることができる、自由度の高いものであったことがわかった。長襦袢の身頃には大きな継ぎ目が2箇所あったが、1箇所は柄を部分的に合わせ、もう1箇所は完全に合わせていたことから、出来るだけ目立たせないようにという配慮も見られた。身頃の2箇所の大きな継ぎ目と、左袖の5箇所の継ぎ目は、不規則で左右非対称であるため、汚れや傷み等を取り除いた可能性が高く、生地には袂を入れることは、日常着としての着物を長く着るためのひとつの方法だったと考えられる。裾の補強布の2箇所の継ぎ目は左右対称で、大きいもの(長着)から小さいもの(長襦袢)へ作り替えたためできた残布で左右対称に継げた可能性がある。衿の中心の縫い目は、現在でも見られる節約のための継ぎ目で、生地を大切に扱っていたことがわかる。替え袖の継ぎ目は、右袖ではなく左袖に5箇所と偏っており、左袖への拘りが見られた。修繕の際、袖の左右に拘りの違いがあったのかどうかという点について、今後調査していきたい。

繰り回しについては、写真の上前の胸回りの柄の向きから、長襦袢では生地の変換が確認でき、長着から長襦袢に作り替える際に、単に身丈を短くしたのではなく、上前の大幅な部位の配置替えを行っていたことがわかった。前述のように上前には2箇所の継ぎ目があり、柄にも配慮していることから、配置には心を砕いた様子が見て取れ、上前に強い拘りが見られた。上前の身頃にそれほど手が加えられているため、長着に付いていた衿と衽を外した後、背縫いも脇縫いも解く必要があり、殆ど一から作り直したと考えられる。良い配置を熟考し、袂を入れて何箇所も継ぎ、長襦袢の形に出来上がってから、肩揚げを縫ったと考えられる。

長着から長襦袢と替え袖に作り替えた理由や時期について明確に特定はできないが、虫害

の範囲を確認すると、長襦袢の身頃では下前（右）の前身頃の下部分に最も多く見られたことから、着用した時に隠れるように配慮したとすると、生地の変色が原因だった可能性が高い。

静さんの思い付きによる補強の創意工夫は、衿下に付けられたピンク色の細い綿布による補強布と、擦り切れやすい裾に付けられた共布による補強布で、傷みや汚れの予防策として施されていた。衿下に補強布が付けられていることは珍しく目にしたことのない方法であることと、裾に手芸用リボンを付けるケースはよく見受けられるが、共布を使用していることは、静さんの創意工夫によるところが大きい。残布等を臨機応変に利用していたと考えられる。

静さんの縫製や修繕の特徴は、入念に補強され、特に頑丈に作られている点である。また、基本を踏まえた上で、自分なりの創意工夫を凝らしており、静さんの発想の豊かさや、思い付きを形にする和裁の技術力と、臨機応変に対応する理知的な面も垣間見えた。

本資料では、修繕、継ぎ目、繰り回し、独自の創意工夫による補強の痕跡が確認できたが、小さな虫害の傷みは修繕を施し、損傷の顕著な箇所は部分的に切り外し、最終的には異なる種類に形状・用途を変化させ、残布で汚れや傷みの予防策を行うなど、劣化や破損の進度に応じた段階的な対応も、垣間見えた。日々の家庭生活の中で、愛着のあった着物を、高度な和裁の技術を駆使しながら、長期的に手入れを行い大切に使用していた例と言える。

本稿は、「ミュージアムニュースNo.3」（附属総合ミュージアム2021年）の記事と、附属総合ミュージアム2021年度研究報告会（2021年11月17日、武庫川女子大学）、関西圏女子大学連携プロジェクト第10回異分野交流会（2022年2月5日、武庫川女子大学）での口頭発表の内容と、あわせ加筆修正したものである。

謝辞

調査をご指導くださった武庫川女子大学附

属総合ミュージアム館長の横川公子先生と武庫川女子大学生活環境学部生活環境学科准教授の井上雅人先生に厚く御礼申し上げます。

同ミュージアム元助教の樋口温子先生、助教の伊永陽子先生ならびにミュージアムスタッフの皆様のお力添えに、心より感謝申し上げます。

注

注1）近代衣生活資料の着物は、主に明治から昭和初期の一般家庭の中で使用されていた寝間着や作業着などの普段着から、人生の節目に継承されてきた礼装用まで、その種類や特徴は多岐に渡り、近代の衣生活の痕跡を残す実物資料であり、古物商から購入したものや寄贈者から寄贈されたものが主である。なお、ミュージアム所蔵の登録有形民俗文化財に登録された近代衣生活資料について、横川ミュージアム館長は次のように述べている。「普通の人々の和装を中心とした衣生活の資料群である。普通の人々とは、身近な等身大の人々を指し、近代になって拡大した都市に生活する人々が着用してきた衣類と、それを作り出す道具類や着装を支える小物類、そうした営み全体と関わる教育資料などを含んでいる。総数にして二五一八件（九〇九二点）になる。」（横川2021）⁴⁾

注2）1996年（平成8年）から和裁に従事。実家が着物の仕立屋だったこともあり、大学卒業後、神戸市にある同業者の仕立屋で5年間（1996-2001）の住み込みでの和裁修行を経て、明石市及び芦屋市において和裁教室を主宰。職業訓練指導員免許（和裁科）取得（兵庫県知事,2000年）、技能検定1級（和裁）取得（厚生労働大臣,2003年）ほか

注3）中田家コレクションとは、中田静さんの遺品で、親族からミュージアムに寄贈されたものである。中田静さんには几帳面

に物や記録を残す習慣があり、着物類の購入記録なども見つかっている。静さんは高等女学校で和裁を習得して、自分で身の回りの着物を縫製していたようだが、家一軒分の生活用品をほぼそのまま寄贈いただいたことから、着物だけではなく、着物にまつわる品（着物姿の写真や、和裁用具や、着物のコートに関する紙面）も見つかっている。中田家コレクションとその特徴について、横川は次のように述べている。「大阪市の南の美章園（中略）に、戦前からの一角が残っている。昭和10年頃に建った三軒町屋があり、その中央の家が、ほとんどすべての生活用品（以下、モノと称する）をご寄贈いただいた中田家である。この家に一人暮らしをしていた中田静さん（1920-2009）は、われわれが現地での調査を開始した半年位前に突然亡くなった。そのためモノは、生活していたほとんどそのままの状態に残された。親類の方から、資料館で遺品の一部（初めはキモノや書物のみ）を活用できないかという問い合わせがあって、3回、下見と調査を行った。そうした経緯ののちに家の中にあった、ほとんどすべてのモノの寄贈を受けた。これを中田家コレクションとしている。（中略）中田家コレクションについて特筆に値すると思われるのは、モノの購入や贈答などについて詳細な記録を残していることである。家計簿と日記・日誌を兼ねた記録で、それらを粗品でもらったと思われる中型の手帳に記している。」（横川2018）⁵⁾

注4) ミュージアムでは、収集された資料（衣類）それぞれに整理番号を付け、写真撮影のうえ、寸法などもあわせ調書化している。

注5) モスリン梳毛糸の52番、64番をモス糸と呼び、この糸で織られた平織組織の毛織物をいう^{注16)}。

注6) 肌襦袢と着物の間に着るもの。着物の裏の汚れを防ぐと共に保温の役目とする^{注16)}。

注7) 取り外して付け替えられる独立した袖のこと。

注8) 一般的に着物と呼ばれるもの。成人男女用の長着（きもの）の総称^{注16)}。

注9) 生地遣り繰りとして、着物類の種類を変えて作り直すこと。

注10) 着物の汚れなどを取るために、全て解いて、洗い、糊付け、乾燥等を行うこと^{注16)}。

注11) 原文には「いろく」とあるが、「く」は縦書きで使用される記号であるため、ここでは「いろいろ」とする。

注12) 原文には「だんく」とあるが、注11と同様の理由により、ここでは「だんだん」とする。

注13) 『百時間教授の実際』と『現代裁縫全書』では、継ぎと接ぎが似た意味で使われているため、ここでは統一して「継ぎ目」と表記する。なお、現在では、継ぎと接ぎの意味が異なり、継ぎは布を足して縫い目を割ることが多く、接ぎは、^{どうは}胴接ぎや、長着の裏衿と衿先布を縫い合わせる際や、^{おくみかみ}衽上と裏衽を縫い合わせる際に用いる。

注14) 和裁の最も基本的な手縫いの縫い方。利き手の親指と人差し指で針先を持ち、針穴のある方を中指の第一関節と第二関節の間の指皮に当てて針と生地を固定し、もう片方の手で進行方向の生地を上下させると針先が出るので、出た分だけ親指と人差し指を追いかけるように針先に添えていくことで縫い進められる。訓練すると早くまっすぐ目を揃えて効率的に縫えるようになる。

注15) 着物の縫い込みを手縫いで処理する方法。できるだけ糸を目立たせないように、裏側は糸を約1 cm程度、縫い込みの折り山に通し、表には約1 mm程度の小さな目を出す方法で、それを繰り返

しながら縫い進めること。

- 注16) 社団法人日本和裁士会編『新版和服裁縫上巻』, 社団法人日本和裁士会, 1996年、一般社団法人全日本きもの振興会編『きもの文化検定公式教本Ⅰきもの基本八訂版』, ハースト婦人画報社, 2021年、一般社団法人全日本きもの振興会編『きもの文化検定公式教本Ⅱきもののたのしみ改訂版』, 世界文化社, 2015年、をそれぞれ参照しながら筆者概説

参考文献

- 1) 大妻コタカ『現代裁縫全書』, 研文書院, 昭和9年, 514頁及び527-528頁
- 2) 青芳とみ子『和服裁縫百時間教授の実際』, 婦人之友社, 昭和11年, 2頁及び19-20頁
- 3) 一般社団法人全日本きもの振興会編『きもの文化検定公式教本Ⅰきもの基本八訂版』, ハースト婦人画報社, 2021年, 154頁
- 4) 横川公子「『武庫川女子大学近代衣生活資料』の登録有形民俗文化財への登録をめぐって」, 『服飾美学 第六十七号』, 服飾美学会, 2021年, 21頁及び24頁
- 5) 横川公子「粗品と暮らしの諸相-中田家コレクションから見えてくるもの-」, 『粗品? 粗品! 時代の空気感を映す』, 武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室, 2018年, 4頁